

保育における二人称的アプローチ②

「同感」と「共感」

佐伯 胖
(大学教員)

「同感」と「共感」の違い

本誌の第一一巻第四号(二〇一二年)の特集「問い直そう、保育の中のあたりまえのこと」:『共感』って何だろう?」の冒頭で、私がインタビュアーを受けている。——インタビュアー開始早々、インタビュアーからいきなり「共感するってどういうことか」と質問されています。「例えば、楽しく一緒に滑り台を滑っている子どもたちがいるとして、そこでは同じ楽しさを味わっているんだけど、これって共感っていうことなんだろうか」と。残念ながら、というか、むしろ大変失礼な対応だったと後悔しているのですが、この質問には直接答えず、(無関係ではないのですが)違う話にすり替えてしまったようです。

実は、「共感」とは何かという問いに答えるためには、それと非常に似ている「同感」との違いについて説明しなければなりません。他人の思いや感情に自分の思いや感情を合わせるというのは、他者の思いや感情を自分の思いや感情と「同じ」と見なしているわけですから、これは「同感(sympathy)」であって、「共感(empathy)」ではななのです。

「共感」というのは、自分と他者とはもともと違うという前提で、相手が見ようとしていること、やろうとしていることの背後にあるはずのその人なりの理由や動機について、必ずしも自分自身のそれらと同じではないかもしれないとして、まず「知る」という働きなのです。「楽しい」とか「悲しい」とか「つらい」という情感は、その「知る」働きから「わき起こってくる」ものであり、自分の中にある情感を「当てはめる」ことではないのです。

「ケア (care)」についての論考を深めている N・ノディングズは、自分の「ケア」論を説明する際に、「ケア」はケアする側からケアされる側への一方的営みではなく、人は「ケアしている」というとき、実は相手からケアされてもいるということに留意すべきであるとして、「ケア」という言葉の代わりに(双方に生じている事態として)「ケアリング (caring)」という言葉を使います。その上で、「ケアリング」の背後にあるのは同感ではなく、むしろ共感だとしています。もちろん、ノディングズは「同感」を否定しているわけではありません。母親が子どもと気持ちを通じあうことは、ごく自然なことであり、「ケアリング」の初期段階としてそれが生じることを認めています。人が他者と「かかわる」ときには、あえて「共感」を喚起すべきだとしているのです。相手の振る舞いや様子から、なんとなく「感じている」という同感的情動を超えて、「相手」の人間をしっかりと捉え、受けとめるということ——本当の意味で、「他者を知る」ということ——に踏み込まなければならぬとしているのです。したがって、ノディングズは、共感とは情動的 (emotional) とどうより、むしろ認知的 (cognitive) な働きだとしています (Noddings, *N. The Maternal Factor: Two Paths to Morality*. Berkeley, CA: University of California Press, 2010, p. 12.)。

聖杯伝説

ノディングズは、「ケアリング」が共感を基盤にしたものであることを説明するにあたって、第二次世界大戦の終わりに抗独運動に参加していたさなかに急性肺結核で亡くなった、フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユが隣人愛を説く際に引き合いに出している「聖杯伝説」を、あらためてケアリングの原点として位置づけていきます (Noddings, N. *Starting at Home: Caring and Social Policy*. Berkeley, CA: University of California Press, 2002, p. 14.)。先に挙げたインタビューでも、私は「共感」の説明に（やや唐突ながら）言及しています。ヴェイユは次のように述べています。

聖杯伝説の最初のものの中に次ぎのような話がある。聖杯は、聖体の効力によってどんな飢えをも満たすことのできる奇跡の石であるが、この石を所有することが出来る者は、石を守っている王、世にも痛ましい傷のためにからだの四分の三が麻痺しているこの王にむかって、「あなたの苦しみは何なのですか (Quel est ton tourment?)」とまず最初に言葉をかける人であるという。

(シモーヌ・ヴェイユ著 田辺保・杉山毅訳『神を待ちのぞむ』勁草書房 一九六七年 pp. 88-99)

ノディングズはヴェイユのこの一節をもとに、ケアリングが徹底した受動性 (receptivity) で

あり、相手の人間としての存在を受け入れ、そこに表れている (expressed) 「訴え」 (needs) に注意を注ぐ (engross in) ことが大切です。

先のインタビュアーで、私はインタビュアーから「共感するってどういうことか」と質問されてしまいました。「例えば、楽しく一緒に滑り台を滑っている子どもたちがいるとして、そこでは同じ楽しさを味わっているんだけど、これって共感っていうことなんだろうか」と問われたのです。遊んでいる子ども同士でも、「あれっ？ この子は（私と）違うことを考えてる」とか、「この子が本当にしたいことって、別なんじゃない？」とかに注意を向けることができ、それに「応じた」かわりができるとしたら、それは「共感」でしょう。また、滑り台で遊んでいる子どもたちの中に入った保育者が、遠くの方からこちらを見ていて「入れない」でいる子を目ざとく見つけて、その子に「待っててね。すぐあとで行くよ」と目配せできるなら、その保育者は「共感」を身につけている保育者でしょう。

友達とはしゃいでいる子、けんかしている子、あるいは、どこかの隅っこでひとり遊びにふけている子……どんな子も、「人には言えない（自分でもはっきり自覚もしていない）心のつらさ」を抱えているものです。その気配を察知して、「あなたの苦しみは何なのですか (Qual est ton tourment?)」とまず最初に言葉をかけられる人（実際に声をかけるとは限りませんが）になることが、「二人称的かわり」の第一歩なのです。

次回は、この「人には言えない（自分でもはっきり自覚もしていない）心のつらさ」を「訴え」として、それを察知して「聴き入る」ことについて考えることにします。